

フライ・ストリート

一、陸橋

陸橋は十メートルほどの高さを、傾きかけた日の光に晒されながら遙か彼方の土手に向かって伸びている。眼下には穂の落ちかけたススキ達。原っぱを埋め尽くすそれらは、時折吹く風に身を歪ませながら冬を待っている。彼らの間に橋脚を差し込んで立つ陸橋はさながら海上道路みたいだ。もう使われなくなつて久しい車線には足がはまつてしまひそうなヒビがいくつも入っている。下から見上げれば橋脚の傷みも激しいだろう。無数に入つた亀裂を想像すると、すぐにでもここから逃げ出したい気持ちにかられる。

僕は五月に視線を戻す。

五月は僕のちよつとした不安などおかまひなしにひよいひよいと歩を進めている。確かに高所恐怖症だったはずだけど、リズムカルな足取りからはその心配さえ感じられない。

その様子を後ろから眺めていて、別の不安がよぎつた。もしかして、五月はあちら側まで行くつもりなんじゃないだろうか。そうだとしたら早めに止めないと。もう二十分は歩いているのに、振り返ればもと来た道の方が行く先よりまだ全然短い。本当に渡り切つてそれから戻つて来るなんてしたら、それこそ日が暮れてしまひそうだ。

「ねえ、五月」

「なあに？」五月は手を後ろに組んだまま僕を振り返る。セミロングの髪が風に乗つてふわりと舞う。

「あつち岸まで行くつもりじゃないよね」

「まさか。もう引き返すよ」五月は笑い、分かつてないといった様子でかぶりを振つた。

「イズミは心配性だね。何も教えないとすぐ落ち着きなくなるんだから」

「だってさ、いきなりこんな場所に来るとは思わないじゃない」

「だったらやめとけばいいのに」意地悪な口調だ。

「や、ほら、五月に誘われたら行くじゃない。とりあえずは」

五月は珍しく驚いたような表情になり、それから照れくさそうに笑つた。大きな口がきれいに弓を形作る。

「でもさ、そろそろ戻つた方がいいよ。きつともうすぐ壊し始めるよ」

「そうねえ」五月はコートの袖をまくつて腕時計を見た。余計な装飾のないシンプルな

型。五月の雰囲気によく合っている。「行こっか」

僕達は、見納めということどこを訪れていた。老朽化と幹線道路の発達で使われなくなった陸橋は今日限りで全ての役目を終え、取り壊されることになっている。それに伴って地球を貫くエレベーターの建設が始まり、今はススキがたなびているこの一帯もあつという間に別世界になってしまうことだろう。

「イズミ、それ覚えてる？」五月が壁の欠けた部分を指差した。

う、と僕は情けない声を返す。小学校に入っただったか、五月と遊んでいてぶつかって場所だ。何でだったかは忘れたけど、背中から勢い良く欠けた角にぶつかって、ひどく血が出たことを今でも覚えている。

「五月、あの時もやたら冷静だったよね。僕は痛くて大泣きしてたのに」

「そんなことないって。滅茶苦茶動転してたもん」そう言いながら、僕がぶつかった角を愛おしそうに触わる。泣きわめく僕をずっとなでてくれていた手つきが脳裏に浮かんだ。

そう言えばあの時僕の傷に触れた手は小刻みに震えていたような気もするけど、今となってはよくわからない。少なくとも、今の五月から想像しにくいことは間違いない。

「ここも今日で最後かあ」五月はしみじみとつぶやく。

僕は何か答えようとしたけど、うまい言葉が出て来なくて再び口を閉じた。

それからしばらく、僕達は黙って元来た道を辿った。時々強めの風が吹きつけて来る以外はさわやかな秋の終わりといった風情だった。雲は目がくらむような高さを、動いているのかどうか分からない程度のスピードで横切っている。ススキは身を寄せ合っぴつきりなしにさざ波みたいな音を立てる。五月が何の気なしにコートの襟元を直す。

「今、四時十分だよ」五月が唐突に言った。

携帯を開けてみる。液晶画面は四時二十五分を表示していた。

「二十五分だよ」

五月の動きが止まった。

「どうかしたの？」

「イズミ、それ十五分進めてない？」かすかに声が上ずっていた。

「進めても勝手に修正しちゃみたい。すごいよね今の携帯って」

五月は急いで腕時計を見直すと、僕の手を引ったくるようにつかんで駆け出した。

「待ってよ五月！」僕はでこぼこの地面につまづかないよう必死に走りながら、何とか声を絞り出した。

五月は一瞬だけこちらを振り返り、更に走る速度を上げた。

「待ってたら死ぬかもしれないの！」

訳が分からなかった。ここにいたら死ぬ？ それじゃさっきまでの余裕は何だったんだろう。とにかく五月はそんな嘘をつくタイプじゃないから、僕は黙って走り続けるしかなかった。

運動不足の僕は三分もしないうちにガス欠になって、着いて行くことすらおぼつかなくなった。五月は力の抜けかけた僕の手を血が止まるくらい強く握りながら全力疾走を続ける。普段なら倒れ込んででもこの苦しみから逃げ出す所だけど、さすがに命がかかっている(らしい)だけあって足が自動的に彼女の後を追い続ける。

「今日、ここが壊されるって言ったじゃない？」しばらくして、半ば息を切らしながら五月が言った。僕は既に答える気力もなくて、ぜいぜいと濁った音を返すだけだ。

返事がないのを無視して五月は続ける。

「エレベーターの建設も始まるって話したよね。それって同時なの。エレベーターを造り始めると陸橋吹き飛ぶのよ」

ますます訳が分からなかった。エレベーターを造ると陸橋がなくなるって何なんだ。

「どういう意味か、分からない！ 具体的に、教えてよ！」息も絶え絶えに叫ぶ。

「エレベーターの穴を掘る機械が空から落ちて来て！ 陸橋壊して地面に突き刺さる

の！」

頭のどこかが凍り付いて動かなくなった。

二、ボーリング

足下のコンクリートが濃灰色に染まったかと思うと、世界に薄闇が降りて来た。僕は反射的に空を見上げる。太陽が分厚いカーテンに覆われるところだった。さっきまでは所々に浮いてるだけのちぎり取られたような塊だったのに、雲達は今や空の大半を傘下に収めている。女心と秋の空というものなんだろうか。

五月から話を聞かされた時は気絶するかと思ったけど、ひたすら走るうちにショックにも慣れてきていた。危ない状況で気分が高揚しているのかもしれない。

「ねえ、五月」僕は幾分落ち着いた口調で話しかける。いい加減、息の切れ方も一定のリズムを手に入れたような気がする。

「こういうの、女心と秋の……」

五月が勢い良くこちらを振り向いたので、僕の言葉は宙ぶらりんになった。

「イズミい」彼女は微笑んで言う。

「はい」

「余裕出て来たじゃない」

「そんなこと、ないよ。ものすごく、怖い。急がないと」わざとらしいくらい途切れ途切れな返答。

五月は僕の反論を無視して続ける。

「それだけ余裕あるなら、スピード上げていい？ それか、手え離して一人で走れる？」

「うええ。どっちも無理だよ。嫌だ」

「どこまで本気なのよ」僕を見て呆れたように笑う五月。その視線が上にずれたかと思うと、一転して緊迫した表情が浮かんだ。「来た！」

その言葉につられて後ろを見上げようとして、同時に五月がスピードを上げたので危うく転びそうになった。

「五月、危ないよお」

「ここにいた方が危ないでしょ！」

もっともな話だけど仕方ないじゃないか。

何とか体勢を立て直して再び首を向けると、黒い柱がひと際大きな雲の真ん中から突き出て来た。まだ相当な高さにあるはずなのにはつきり確認できるところを見ると、直径数メートルはある物なんだろう。十メートルくらいあるかもしれない。いや、もったか。

はっきりとは分からないけど、輪郭に凹凸があるように見える。螺旋状に溝が彫り込まれているんだろう。基礎工事でよく使われているボーリングマシンというやつだ。地球規模の工事でも同じような機械を使うんだね。

「五月っ」大きなひび割れを越えながら発した僕の声が、体と同じように飛び跳ねた。

「間に合うでしょ？」

「分からない。でもすごいねあれ。科学は何でもありっていう感じだよね」

五月は横目で僕を見て、わずかに首を傾げた。口元が笑っているようにも見えた。

「時々、君がよく分からなくなるわ」

巨大ボーリングマシンは雲を串刺しにしながらどんどん地上へ、陸橋へ迫っていた。先端はもう雲と地面の中間辺りまで来ているのに、後ろは全く途切れる様子がない。何故わざわざ空から落とすのかと思っただけど、あれだけ長いというなら納得も行く。

秋ももうすぐ終わるといふのに、僕は汗まみれだ。元々汗っかきの僕は額から流れる汗が目を見えないように常に拭いていなければならなかったし、TシャツはおろかYシャツまで体に貼り付くくらい濡れている。普段はあまり汗をかかない五月だって、手は湿っているしコートの中は汗で一杯に違いない。僕は汗を吸って五月の身体に貼り付いたセーラーブラウスを想像しようとして、すぐにそれをもみ消した。五月には言わないでおこう。向こう三ヶ月はネタにされるに違いないから。

そんな事を考えているうちにやっと陸橋の終わりが見えてきた。けど、それでも土手まで軽く二百メートルはある。そして、後ろのボーリングマシンも目標到達へのカウントダウンを始められるくらいに近づいている。にも関わらずその全貌は明らかになっただけで、それが頭の奥にある恐怖を一層かき立てた。

「間に合うかな」

ぼそりとそうつぶやいた僕を見て五月は不敵に笑い、路肩を自信ありげに指差した。盛り上がった瓦礫の向こうに非常階段の印が見えた。

「もっと早く気付けば良かった！」五月は勢い良く言い放つや僕の手をつかんだまま大きな瓦礫を軽く飛び越え、僕はついて行けずに脛を引っ掛けた。

あちこち壊れた階段をやっと降り切った時には、もうボーリングマシンの先端が地面に触れるところだった。そして末端はまだ雲の向こうにあった。瓦礫の角にぶつかった辺りが火傷みたいに痛む。

「離れないと」僕が言い、五月が頷いたところで振動が走った。

まず、足場が崩れたようなガクンという揺れが来て、その後かすかな衝撃波が駆け抜けた。僕は庇おうとしたのか恐かっただけなのか、ほとんど無意識に五月の身体にしがみついた。

最初の揺れが過ぎ去ってしまった後は、どこか遠くの地震を思わせる振動がしばらく続いた。ボーリングマシンは陸橋の丁度中心に着地したみたいだった。中心部は舞い上がった土に隠れて見えなかったけど、土煙のすぐ手前までが完全に崩落していた。今は一応無事な部分も、振動の影響で徐々に崩れ始めている。五月が階段を見つけていなかったらと思うと嫌な汗が出る。

「あのさ」五月が珍しく遠慮がちに言った。

「守ってくれたのか恐かったのか、どっち」

「気が付くと、僕は腰に腕を回した格好で彼女の上に寄りかかっていた。顔がちょうど胸の辺りに押し付けられて、コート越しに感触が伝わってくる。」

「何か違うものも感じちゃうんだけど、その格好」

慌てて五月から離れ、取り繕うように立ち上がって裾のほこりを払う。五月はクククとおかしそうに笑った。

ボーリングマシンは今や原っぱに突き立てられた機械の塔だった。等間隔に備え付けられたサーチライトは交互に赤い光を放ち、本体の回転に合わせて灯台よろしく空と地上を照らしている。段々と弱くなりつつはあるものの、地面を掘る震動は僕達の場所まで伝わり続けて陸橋からコンクリートの欠片を降らせている。

「ねえねえ、イズミイ」五月が甘ったるい声を出した。

「ちよつと行ってみる？」僕は先手を打つ。

「ん、今日はやめとく」

「あれ？」思わず声に出してしまった。

「あれって何。それじゃわたしが無茶ばっか言ってるみたいじゃない」

「そんなことないけどさ。行きたがるかと思ってた」

「うん、ちよつと行きたい。でも、とりあえずここから見てる方が良さそうなんだ。だからちよつとここにしようって言おうと思っただけにあれって何」

「いやその、ごめんね」

「分かったら、はい」

そう言いながら差し出された手を取り、反動をつけて引き起こす。五月の身体は思った

以上に軽くて、危うく胸元まで引き寄せてしまうところだった。

「けっこう力あるじゃん」

五月がわざとらしく感心してみせたので、何だか恥ずかしくなってボーリングマシンに視線を移した。長大な重機は赤みを失いつつある空を真つ二つに割きながら回り続けている。あまりにスケールが大きくて、近くにある割に現実味が感じられない。見ていると僕まで現実から浮いてしまいそうな気がした。

五月はどうして僕と一緒にあれを見に来たんだろう。

「五月。あのさ、実はボーリングマシンとか好き？」

「別にい。メカフェチじゃないもん。あ、何でわざわざ来たとか思ってるでしょ」

「うん、大体そう」

「大体？」

「えーっと、大体じゃなくてそう」

五月はふうん、と分かったような仕草をした。

「そういうことですか。いいけどね。陸橋が最後だっていうのと、あとわたし、エレベーターの方にも興味あったんだ。あ、メカフェチってことじゃなくてね。地下突き抜けてあっち側まで行くのって今までにないじゃん。普通のエレベーターはもういいけど、そういうのは見てみたかったの。だったらせつかくだから造るところからって思うじゃん」

そう言っ地球の裏側を指差す。

「普通かあ。それじゃ、完成したらまた来るつもりなんだ」

「そりゃもちろん。君も行くでしょ」

僕はダイレクトバスよろしく反射的に頷いた。地球エレベーターなんて新しすぎて少し怖いけど、五月と一緒に楽しめるような気がする。

それにしても普通のエレベーターはもういいって、どういう意味だろう。やっぱり高所恐怖症は昔のままなのかな。五月と一緒にエレベーターに乗ったのは一度だけだし、その時事故とかがあった覚えはない。それか、他に何かあったのかもしれない。でも陸橋の上には別に別に怖がってた感じもなかったみたいだし、実際にどうなのかは聞いてみないことには分からない。けれど今はそんな話をする場面じゃないように思えたから、僕は何も言わずに五月と同じ方向を眺めておく。そのうち聞いてみればいい。

そんなことを考えていたら、真つ赤な光がもったいぶったスピードでススキの上を走り抜けた。

三、セントラルライン

息が整ってハンドタオルで顔や首筋の汗を拭いて、そびえ立つボーリングマシンをやつと落ちて見られるようになってから五分も経たない内にそれは起こった。

身体のあちこちを欠きながらもそれなりの威厳をもって僕達を見下ろす陸橋。その橋脚と地面の境目から薄黄色の光が発したのだ。

それは薄く引き延ばされたサテンのように柔らかなつやを帯びた光だった。光はまず橋脚の台座よろしく地面を覆うような角度で放たれ、それから徐々に空中へ広がった。そして、間を置かずに隣の橋脚からも同じように光が。どうやら手前の土手側から順に来ていくみたいだ。

光の浸食は、あんぐりと口を開けた僕達を軽く置き去りにしたまま段々と加速してゆく。その光景は舞台へ降りてゆく緞帳を思い起こさせた。上下は逆だけれど。遠くから見たらなめらかで綺麗なんだろうなと思いつつ、僕は五月の手を引いて少しずつ後ろに下がらせる。嫌な予感がした。見慣れないものが目の前に現れたらいつだって嫌な予感はそのんだけど、今回のはまた違ったやつ。

「もっと近づいてみないの？」

大当たりだ。

「や、その、もうちょっと下がった方が綺麗に見えるんじゃないかと思って」

「嘘だよね」

五月って本当はひどい人なんじゃないだろうか。折に触れてそんな考えが頭をよぎる。小学校の頃、誰にも見つからないように学校菜園のプチトマトを盗み食いたことを思い出した。その時も何故か五月にだけはばれてしまって、あとで散々いじられた。今と同じように、笑いながら「嘘だよね」って言われたのもよく覚えている。それから先、何かをごまかそうとする度にこの一言で全部吹き飛ばされて、いつの間にか僕は五月の手が届かない所に行けなくなっていた。高校生になった今でも。別にどこかへ行くつもりはないからいいんだけど、先々は不安だ。

余計な思考を巡らせているうちに、光は既に全ての橋脚を覆い尽くしていた。相変わらず煙のせいでボーリングマシンの向こう側は見えないけど、多分こっちと同じく光のベールに包まれているはず。そうでなかったら筋が通らない。

光が突然強くなった。眩しさで視界がきかなくなってしまうくらい鮮明になって、反応

する間も与えずに夕方の世界を即席の昼へと引きずり込む。それでも両手で顔を守りつつ必死に目を開けると、橋桁が宙に浮いていた。いや、光に支えられて宙に浮いているように見えた。瑞々しい光線は隙間すらなくくらいに広がって、橋脚を完全に隠し切ってしまった。

「下がって良かったよね。ね」

僕の声は目の前の光景につられて普段より大きくなっていた。

「うっそだあ」五月もまた大声で楽しそうに、歌うような調子で答える。

今や城壁のように分厚く層を成した薄黄色の光線は、やがて橋桁をも飲み込み始めた。主桁からコンクリートの床板へ、ゆっくりと、確実な速度で腕先を伸ばして行く。それがあまりにもスローペースな上に淀みがなかったので、僕は橋桁が沈んでいるのか光が勢力範囲を広げているのかよくわからなくなった。それを思わず口に出すと、今はどっちでもいいじゃないと五月が言った。何の意味も込められていない虚ろな言葉。

「五月はすごいよ」

「何言ってるのかよくわかんないよ。私、そんな頭良くないもの。難しい事とか言えない。イズミみたいにたくさん考えられないだけだよ」

「そうなのかな」

「納得しなくていいのよ、ちょっと悔しいから。ねえ、全部見えなくなったけど、あの光消えたらどうなってると思う？」

「陸橋が綺麗になってるとか」

五月は突然、僕の顔を心配そうに覗き込んだ。

「イズミくん、もしかして疲れてる？ 大丈夫？ 少し寝た方がいいんじゃない？」

「何だよ」

「取り壊しって言ったの忘れちゃった？ 君って何か色々抜けてるんだから。まあそれがいいってこともあるんだけどさ。でね、きつとき、あの光が消えたら陸橋も消えてなくなってるよ。絶対そう」

僕は小さく頷くのが精一杯だった。頬が熱くなって首筋に汗が滲む。五月の前では間違っていない事なんか何一つ言えない気がした。

五月が僕の頭を優しく叩く。

「ほらほら、見て」

光が晴れてきた。橋は、五月の言った通り消えてなくなっていた。まるで大掛かりなマ

ジックだ。イリユージョンっていうのか。派手な衣装のイリユージョニストが大股開きでポーズを決めると、巨大な暗幕がさつと落ちて建物が消滅する。この間もどこかのテレビ局が中継していた、あれにそっくりだった。違うのは暗幕が光で、落ちる速度がイリユージョンよりずっと遅いこと。まるで陸橋を頭からじっくり味わうように、光の壁は背を縮めてゆく。あとには石ころ一つ残さずに。

数分たっただろうか。光は元通り橋脚の根元に、いや、根元だった所に吸い込まれ、そして疾風のように視界を一気に駆け抜けけると跡形もなく消え去った。一瞬だけできた光の道。

五月が大きく息をついた。日はもう大分傾いて、土手の奥に連なった屋根に半ば姿を隠していた。土手と土手の間には僕達とあのボーリングマシン以外、何一つ動く物がないみたいだった。時折思い出したように北風がやってきて背の高い雑草達を騒がせ、僕達は二人して身をすくませた。ボーリングマシンはかすかな振動を絶え間なく伝えていた。

「戻ろっか」と五月。

「戻る？」

「そう、ススキさんどかして土手の方に帰るの。それともまだいたい？ もうちょつとならいいよ」

「や、戻るよ。何か寒くなってきたもんね」

「OK、それじゃ日が暮れないうちに行こうよ。陸橋の跡、上からも見たいでしょ？ 早くしないと真っ暗になっちゃうよ」

いやにあっさりしてると思ったら、そういうことだったのか。

「暗くなったら寒いし、イズミはきつと転んで怪我するもの。早く行こ」

五月の声に急かされるように、元来た道を再び歩き出した。時間と共に暗さを増す野原はどうしても歩き辛く、僕はずつと足下に注意していなければならなかった。五月は相変わらず楽々と僕の前に行く。足の裏にセンサーでも付いているんじゃないだろうか。

「イズミ」五月が前を向いたまま話しかけて来た。「穴掘り機、あんまり大した事なかったよねえ」

うまい答えが出て来なくて、僕は仕方なく沈黙を返した。大した事なかっただって？

「イズミ、聞いている？」

「え、いや、うーん」やつとのことと声を絞り出す。

「だってさ、あれ一発で全部吹き飛ぶと思ってたんだよ私。もっと派手に爆発するとか

あってもいいと思わない？」

「そしたら今ごろ僕達も木っ端微塵だと思う」

「そうかなあ。多分大丈夫だったんじゃないかしら。あ、ここ大きな石ね」

僕はすんでの所で地面から突き出した石を飛び越えた。五月の歩くペースは相変わらず速くて、油断したらつまづくか置いて行かれてしまいそうだ。

もう土手は目の前に迫っている。視界の端まで伸びた自然の坂は、夕暮れの影に覆われて黒い城壁みたいだ。陸橋から見下ろした時よりもずっと高く見える。

「高いなあ」何となしにつぶやいた。

「登れる？」

「うーん、多分」

「頑張れー。登らなかつたら陸橋みたいになっちゃうかもしれないよ」

背筋を何かが駆け上がった。そうだ。考えてみれば、あのまま陸橋にいたら一緒に消えていたかもしれない。何ていうか、紙一重で生き残ったような感覚。

「上に残ってたら、僕達も陸橋と一緒になっちゃってたかな」

「ん？ そうかも。そう思うと良かったねえ、降りてきて。階段なかつたら今ごろ私たち人柱かも」

「恐いこと言わないでよ。危なかつたんだなもう」

「イズミくんは私と一緒に消えるの嫌かしら？」

五月が軽い調子で軽くない事を言ってきたので、僕はまた言葉に詰まった。彼女は時々こんな爆弾を投げつけて来るけど、からかいなのか本気なのか分からなくて困る。

とにかく話題をそらすことにした。

「そう言えば五月、何でボーリングマシンのこと知ってたの？ 解体とかエレベーターは僕も知ってたけど、あれがいきなり来るなんて誰も話してなかったよ。ニュースでも」

「ああ、あれ？ うちのお父さんの友達がエレベーター工事やる会社のお偉いさんと友達だったの。それで情報が入ってきたってわけ」

「国内の会社が工事するんだ」

「そりゃそうよ。エレベーター技術って今、うちらが世界一なんだよ。すごいでしょ」

「すごい」僕は感心して言った。

「でも、いきなり断りもなしにボーリングマシンが来るなんて恐いなあ。一応告知くらいして欲しいよね」

「うん。まあ私らは断りもなく陸橋に来ちゃったから人のこと言えないけど」

「私、ら？」

「あははー」五月は笑いつつ、背中越しに僕の頬をつねった。

土手を上り切ると、太陽はほとんど屋根が形作る稜線の奥に沈んでいた。秋の夕暮れは本当に短い。もうすぐこの時間を楽しむ暇さえなくなつて、夜ばかりの冬がやって来る。僕は毛羽立ったコート襟元を直し、袖で額の汗を拭った。コートの生地はまだ染み出して色を変えてしまうくらいの汗。こんなに運動したのはいつ以来だろう。

坂から少し離れた所まで歩いたところで力尽きてしまい、その場にしゃがみ込んだ。もう一歩足りとも歩きたくない。時間をかけて息を整えてから陸橋の跡地に視線を投げる。

と同時に、今日何度目か分からない驚きの声を上げた。反射的に五月の顔を見上げる。彼女もまた驚いて目を見開き、釘付けにされたような視線でそこを見ていた。

ついさっきまで陸橋があつた所は真新しい道になっていた。

暗くてはつきりとは分からないけど、色は多分チャコールグレー。中心には途切れ途切れの白線がくつきりと引かれている。一見ただけで分かる、道路だ。しかもこれまで見た中で一番真っすぐな道路。まるで土手からボーリングマシンの中心へと迷いなく伸びる、野原の中心線みたいだった。最後に光が走つたのはこのためだったのか。

時計が五時を指してどこからか童謡のメロディーが流れ出した。それに呼応するように、道の両脇で碧のランプが点滅を始める。土手から順に、同じ間隔で。飛行場の進路灯を思わせるそれらは真っ暗に近い野原を繰り返し駆け抜け、ボーリングマシンの赤いランプと相まって、一つのオブジェのように見えた。

「イズミ」五月が所在なげに言う。

僕はギクリとした。こういう時は大抵何かある。

「そろそろ帰ろう」

「あれ？」

「だからあれって何よ。君、また私を誤解したね？」

「してないしてない！ 賛成。帰ろう。ね」

「ふううん」五月はいぶかしげに僕を見る。「ジュースおごってくれる？」

「う。……分かったよう」

「イズミは弱いねえ」

五月に見つからないようため息をついた。途端に五月が僕の顔を覗き込んだ。

「ちよっ！」

「来て良かった？」

五月の目は打って変わって真剣そのものだ。

僕は少し間を置いてから、何も言わず頷いた。

「ありがと。また付き合ってね」

そう言って微笑む。

僕は何だかいても立ってもいられなくなってボーリングマシンを見た。彼はさっきと変わらず、無関心そうに地球を掘り続けていた。

四、ダミー

土手の雑草が北風に揺れていた。先に行く五月は相変わらず軽やかな足取りで、両手をポケットに突っ込んだまま急な階段を一段飛ばしで上っている。一歩ごとに口元から白い息が舞い、かすかに浮いてはすぐに空へと消えて行く。

僕は置いて行かれないよう急ぎ足で後を追う。五月は、時折僕を振り返っては楽しそうに手招きを繰り返した。

「スカート覗いちゃ駄目よ」

穴掘りが終わったから見に行こうと五月が誘ってきたのは、陸橋が壊されてから三ヶ月近く経ったある日のこと。

季節はもう掛け値なしの冬だった。冬至を過ぎて日は長くなり始めているものの、それと逆比例するように寒さは深さを増してきていた。家を出る時間にはガラスに霜が降り、土は凍りつき、露出した指先は無条件に赤く焼けた。空気は際限なく冷えて行くようで、本当に寒さが底をつく日が来るのか不安になるくらいだった。

そんな閉塞感にも似た感覚で冬を過ごしていた僕は、五月の誘いにあまり乗り気じゃなかった。この寒いなか吹きさらしの原っぱを通り抜けて建設現場に行くだなんて。想像しただけで鳥肌が立ってしまいそうだ。

その気持ち表情にも現れていたのか、僕の反応を見た五月はあからさまに顔をしかめていた。後で聞いたら本当に嫌そうな顔をしていたみたい。引っぱたいてやろうかと思ったと、口を尖らせていた。五月は時々物騒になる。

「立ち入り禁止になってるんじゃないのかな」僕は一応の抵抗を試みた。

「大丈夫、ちゃんと見学許可もらったからさ。もしかして面倒？ また付き合ってたって言った時、うんって言うてくれたじゃない。行こうよー」

そうだったんだ。

僕はその時の会話をよく覚えていない。何となく気持ちが落ち着かなくて、どうにか気を散らそうと努力していた印象だけが強く残っている。きつと抱きついたので、とりあえず余計な発言は控えてOKの返事をした。気が進まないのと断らないのは別次元。

「いいけど、いつ行くの？」僕は言う。

「いつ」

五月は質問の意味がわからないとでも言いたそうな顔になる。

「いつって」

それからはっとして、両目に深刻ぶった表情を浮かべた。

「イズミ。本当は私に付き合おうの、嫌？」

「うわあ」

五月が何かしようと言う時は、即ち今すぐということなのだ。出来るだけ早く、忘れないうちに。僕達の不文律。確かに僕の質問は間抜けだった。

そんなわけで、僕達は学校が引けるやエレベーターの原っぱに向かった。

まず驚いたのは、つい二、三日前まで頭を出していたはずのボーリングマシンが跡形もなくなっていたことだ。いくら仕事を終えたからと言って、機械がその場で溶けてなくなるなんてちよつと考えられない。だから解体されて運搬車両にでも載せられているだろうと思っていたのに、原っぱの中心にはドリルの欠片すら見えなかった。

「五月、あのボーリングマシンってどうなったのかな」

「溶けてなくなっちゃったみたい」

信じられない。

「本当？」

「本当かどうかは分かんないけどさあ、お父さんはそう言ってたよ。溶けて壁の一部になるんだって」

そんな技術があったのか。でも、陸橋を道に変えてしまえるんだからそれくらいは出来るかもしれない。

僕達は軽い駆け足で土手を降り、開通三ヶ月目の道路に踏み込む。靴越しにも分かるほど滑らかなコンクリートだ。本当に凹凸というものが全く感じられない、何もないのに滑ってしまいそうなくらい平らな地面。あの光がどんな方法でここをならしたのかは分からないけど、そこら辺の道路と同じではここまで滑らかなにはならないと思う。空港や宇宙港みたいな造り方をしているのだろうか。

しゃがみ込んで地面に触れる。よそよそしさのない大理石という感じの手触り。心なしか、かすかに温かみが伝わって来るような気もする。そう言えば、これは形を変えた陸橋なんだ。

「五月」

呼び声に応えて五月がほいと振り返る。

「陸橋は壊されちゃったけど、死んだわけじゃなかったね。まだちゃんとここにいるんだね。形が変わっただけで。そう思うと何だかほっとする」

「センチメンタルだねえ」

「うん、本当はあの時、陸橋が爆発とかしなくて良かったと思ってたんだ。だから光が出てきた時は今度こそ陸橋をどこかにやっっちゃうんじゃないかって恐かった。なくなるのは嫌だから。でも、ちゃんと残してくれてたんだよ。すごく嬉しい。五月もそうじゃない？」

「いやー、まあねえ。陸橋好きだったし、あの子がこれになってくれたんなら万々歳かな。これなら下に落ちたりしないし」

「あ、五月って……」

「言いかけた途端、地面から細かく風が吹き出して、転がっていた石や塵を道路の脇へと追いやった。五月がスカートの裾を押さえながら感心したような声を上げる。

「今の何だろう」

「ここさ、何とかっていう製法で埃や石ころが飛んできてもすぐ吹き飛ばしちゃうようにしてるんだって。ぶわって」五月は片手で大きく払いのける仕草をした。「すごいよね」

「へええ。ちゃんと覚えてる五月もすごいよ」

「話したら喜びそうだったから。イズミ、こういう話好きだもんね」僕を指差し得意げに笑う。

照れくさくなつて五月から視線を外した。五月は時々、不意打ちみたいに僕のことを意識する。以前ならそれも自然に受け止められていたけど、陸橋の件以来どうもそれがうまく行かなくなつたみたいだ。

と、建設現場で何かが動いた。

「あ」僕は間拔けな声を上げる。

よく目を凝らしてみると、地面から灰色の直方体が頭を出していた。しかも動いていた。オフィスビルのシルエットみたいなそれは重力を感じさせない動きで十メートルか二十メートルの高さまで伸び上がって一旦停止し、それから時間を巻き戻すように地面へと吸い込まれてわずか数秒で平面に回帰する。

「何だろ今の。おじさんは何か言ってた？」

「うーん、別に何も言われなかったなあ」五月は顔をしかめる。「や、待って、建物の実地試験やるとか言ってたからそれかも」

「実地試験って」

「何か実際に建てたらどんな感じになるのかシミュレーションするんだって」

「それじゃさ、あれは立体映像とかそういうのかな」

「行けば分かるって。ほらほら！」

五月はおもむろに手を差し出し、僕は半ば反射的にその手を握った。手袋越しに五月の温かみが伝わって、心臓が小さく縮んでしまうような気がした。やっぱり抱きついたのが何かのスイッチだったのかもしれない。

あちらではビルのプロタイプが時々顔を出して不規則な上下運動を繰り返す。すっかり枯れてしまったスキに囲まれた一帯で試験に精を出すタミー。その様子からは目的のためだけに生きているような潔さというか清々しさというか、すっとした感覚が見て取れた。こういうのを機能美というのかな。

「イズミ、あれって実はエレベーターだったりしないかな」

「違うと思う。あんな壁も何もないエレベーターいやだなあ」

「やっぱそうだよね。でも何か未来っぽい。周りは普通の原っぱなのに真ん中のあそこだけ未来なんて、何か不思議。わたし達って今から未来に行く人みたいじゃない？」

僕は頷いて見上げる。言われてみれば、エレベーターの辺りだけ時代が違うようにも見える。それなら、僕は五月と一緒に未来へ向かっているんだ。その先には何かがあるのか、僕達はどう変わって、どんな顔をしてそこに行くのか。そんなことを想像するとどうしていいか分からなくなって、少し恐い。

「びびってる？」

五月が見透かしたように言ったので、思わず手に力が入った。

「いたっ」五月が小さく悲鳴を上げる。

「ごめん。いきなりだったからびびくりして」

「イズミも恐がりだねえ。そんな心配しないでよ、ね！」

「わかったよう」

僕の歯切れの悪い返事を聞いて、五月は諦めたように微笑した。

そうこうしているうちに建設現場の入口に差し掛かった。閉じられた大きなゲートを透かして重機と建材と、そしてエレベーターの穴を覆う月面基地みたいなドームが見えた。

五月に促されて脇の守衛小屋に顔を出す。事前に話を通っていたのか、守衛のおじいさんは五月が一枚の紙切れを見せただけですんなり門を開けてくれた。いくつかの注意と来客用のタグをくれただけで、案内役も何もつけてくることはなかった。こういうものなんだろうか。

「邪魔しちや悪いと思ったんじゃない？」五月はあっけらかんと言った。

ドームを中心に、反時計周りに進む。真つ平らな地面を厚みの無い直線が等間隔で区切っている。西から東へ、北から南へ、方眼紙みたいに升目を浮き上がらせる。そこが道だから決して外れないようにと守衛さんは言っていた。そうすれば大体安全だと。

確かにそれはその通りで、線に囲まれた区画からは何の前触れもなくダミーが立ち上がるから外れようにも外れられなかった。恐ろしい場所に来てしまったと、僕は少し後悔した。

五月はそれにもすぐ慣れてしまったみたいだった。苦手なものでなければあつという間に順応してしまうのは長所か短所かわからないけど、どちらにしても五月の特徴だ。だから、僕はいつも彼女の後を追いかける。五月が軽く押し開けた扉の向こうを恐る恐る覗き込んで躊躇して、やつとのことできぐり抜けるといつも彼女が待っていてくれる。

何かの勢いでもう待たなくていいなんて言って、怒り狂った五月に手加減なしで引っぱたかれたことを思い出した。後にも先にもあんなに怒った五月は見たことがない。

「五月」

「なあに？」

「もう待たなくていいって言った時のこと覚えてる？」

「覚えてるよー。また引っぱたいて欲しい？」

僕は答えず、代わりにぶんぶん首を振る。

「あはは、やっぱ痛かったんだ。結構強くやっただもんね」

「思いつきりじゃなかったの。五月って相当力つよっ」

言い終わる前に右手を握りつぶされた。

「さっきのお返し」

染み込むような冷たい空気が渦を巻いて、五月は身震いし、乱れて顔にかかった髪を何とかしようと首を振る。左手は僕とつないだまま、右手もポケットの中から出そうとしている。もつれた髪はなかなか戻らないけど、それでも手を冬の空気にさらしたくないみたいだった。

僕はためらいつつ空いた手を伸ばし、眉毛の辺りにかかった髪を軽くすいてみた。細くて癖のない髪は驚くほど簡単にほだけ、元あった場所に抵抗なく戻ってゆく。

五月は僕の手を見ると一瞬ためらうような表情になり、それから視線をゆっくり顔の真ん中へと移した。茶色がかった瞳に凝縮された意志みたいな光が浮かんだ。予定外の沈黙が僕達の間を支配して、肌が汗ばむのを感じた。視線を外すに外せない。手が、五月の頬に触れるか触れないかの所からどこにも動かせない。音が消えて、時間が歪む。

その時、立ち上がったダミーの間から強いビル風が吹き込んできた。五月は反射的に空いた手で頭をかばい、反応しきれなかった僕の頭はなすがままになった。舞い上がり絡み合った髪はさっきの五月どころじゃない。まるで寝起き状態だ。

五月は軽く笑って僕をくしゃくしゃと撫でた。

「ほら」と、ドームを指差して言う。僕を見る目にさっきの光はない。いつもの五月だ。

僕は大事な瞬間を逃したようなやるせなさを覚えつつ、いつも通り彼女の後に続く。目の前にはたるみのない帆布みたいなドーム。

不意に五月の足下がゆらめいた。それは淀みなく僕達の周囲へ広がり、正方形を形作る。頭の奥で走れという声があった。

「五月！」

叫んで駆け寄ろうとした瞬間、地面が上昇し始めた。

五、エレベーター

ずっと昔、フライ・ストリートっていう高層ビルで、最新鋭のエレベーターに乗ったことがあった。エレベーターの名前もそのまま『フライ・ストリート』。床も壁も空気みたいに透明なガラス張りでやたらと見通しが良くて、その向こうに見えた景色がすごい勢いで流れていた。きれいに磨かれたサッシがディスプレイの走査線みたいにどンドン上から現れては通り過ぎて行ったのをよく覚えてる。

ダミーが上昇するスピードはそれどころじゃない。端から見ると速くて、重力が何倍にもなって僕達に襲いかかってくる。大体、線からはみ出したわけでもないのに何でこんな事になったんだ。アバウト過ぎるよ。

そう言えば、あの時は五月も一緒に乗っていた。ものすごい加速で上がって行く間、彼女は どうして たんだっけ？

頑張ってみたけどやっぱり思い出せなくて、何だか申し訳ない気持ちになる。

僕は四つん這いのまま五月の所へ急ぐ。床に押し付けられてなかなか思うように動かない手足を必死に伸ばし、もどかしい思いで一歩ずつ進んで行く。最後に見たとき五月までの距離は三メートルあるかないかだったはずなのに、いくら這っても彼女の細い手は視界に入ってきて来ない。一瞬、嫌な予感が首筋を走った。

「……こつち来て」

かすれ気味の声の頭の上から聞こえた。その頼りなさは心配をかき立てるけど、とりあえず一安心だ。

「五月？」

「早くこつち来て！」

今度は頼りない叫び声。後押しされるように目一杯手を伸ばすと、ちょうど五月の腕に触れた。

五月も両手を床について、ほとんどうずくまるような格好で下を向いていた。僕の手に気付いてわずかに顔を上げたけど、周囲の景色が目に入るとすぐさま目をつぶる。眉間に皺を寄せて、まるで暗闇に取り残された子供みたいに。

五月の高所恐怖症は治ってなんかいなかった。

僕は何とか上半身を起こし、空いた手を五月の乱れた髪に添えて軽くかき上げた。普段

は何かあろうと健康的な色をしている頬は血の気が失せたみたいに真っ白で、一日外にいたんじゃないかと思うくらい冷たい。額にはうっすらと汗がにじんで、髪の毛が何本かまとわりついている。風邪で寝込んでいた時とそっくりだ。さっきまでケラケラ笑ってた女の子は一体どこへ行ってしまったんだろう。

「大丈夫だよ、五月」

五月は目をつぶったまま小さく頷く。腕が小刻みに震えていて、全然大丈夫じゃないことを僕にはつきりと伝えて来る。

「きつともうすぐ止まるし、現場の人達も気付いてくれるよ。すぐ下ろしてくれるよ。多分」

言葉の端々に自信のなさが出てしまう。何で僕は臆病なんだ。

「イズミも高い所苦手だったっけ」

「や、そんなでもないんだけど、やっぱりさ、こういうのってちょっと……」

「怖い？」

うんと答えて頷く。すると五月が顔を上げ、歯を食いしばりながらゆっくりと僕の目を見据えた。

五月は両目にうっすら涙を浮かべながら、弱々しい微笑みを僕に向けた。

「あんまり怖がらないで」

衝動的に五月を抱きしめた。

彼女は針で刺したみたいにくりと身を震わせたけど、抵抗はしなかった。

僕はそれ以上どうすることもできなくて、しばらくの間、ただ覆いかぶさるような体勢で五月の背中を抱いていた。そうしていると冷たい風が僕達を避けて通るように感じられて、ほんの少しずつだけ不安が溶け始める。彼女の体温も心なしか元に戻ってきたような気がする。

不意に五月が身体を起こした。それはちょっとした動きだったけど僕を驚かせるには十分で、思わず熱い物でも触ったみたいににくりと両手を五月から離してしまった。

五月は一瞬きよとんととして、それからクククと声をもらし、最後にはこらえきれないという様子で床を叩いて大笑いした。もちろん下を向いたまま。

「別にそんな逃げることはないじゃない」

ひとしきり笑ったあとで五月は言った。いつもと同じ、どこか間延びしたような口調。少しは気持ちが悪く落ち着いたのかな。まだ肩は震えているけど、峠は越えた。そんな感じ

だった。

ダミーの動きはいつの間にか止まっていた。十階建てのビルと同じくらいだろうか。物差しがないからよくわからない。横目でちらっと景色を見た限りでは、想像を絶するような高さまで行っていないかった。その分だけ恐くもあるけど。

風が少し強く吹いて、五月の身体が大きく震えた。僕は再び手を伸ばそうとしかけて固まった。こういうのは考えてしまったら終わりなんだろうけど、僕の身体はどうしても自分から勝手には動いてくれないみたいだった。中途半端に持ち上げた両腕をどこにやっていいのかわからない。どうしよう。

「あー、寒」

五月がわざとらしく独り言をつぶやいて顔を上げると、僕の目をじっと見据えた。有無を言わさない視線。もう覚悟を決めるしかないみたい。

「風よけ、いる？」

五月が小さく吹き出して頷いたので、恐る恐る手を伸ばした。さっきと同じく背中を包むような感じで、今度はゆっくりと。風に揺らされた五月の髪が鼻先をくすぐる。手の平がコートに触れるか触れないかの辺りで、五月は僕の懐に潜り込んできた。壁の隙間をくぐる猫みたいなやわらかさだった。僕はためらいを踏みつぶして再び背中を抱いた。

「いいね、風よけ。君も少しはあったかいでしょ？」

何とか返事を絞り出す。けど、頭の中はそれどころじゃなかった。これからどうすればいいか、形のない考えがいくつも出てきては見えなくなる。キス？ 何考えてるんですか。何とか気を散らさないと、心臓が五月の頭を叩いてしまいそうなくらい景気良く運動してる。僕は例によって周囲に視線を巡らせた。こういう時は遠くを見るに限る。

空はやけに鮮やかな灰色の雲が覆っていて、彼方に見える夕焼けとフレームのない写真みたいなコントラストを描き出している。地上だけ地下の方からは低い振動音が聞こえて来る。工事は中断してないんだ。まさか気付いていないことはないはずだから、きっとこれは深刻な事態じゃないに違いない。というか、そうでなかったらもう泣くしかない。

五月は僕の右手を背中からどけると、そのまま強く握った。冬を手袋にしたみたいに冷たくこわばった手。そのまま目尻に残った涙を僕の袖で拭い、二、三度まばたきをしてから胸元に添える。

「どうしよう」思わず声に出してしまう。

「どうもしなくていいよ」五月は気にもせず答える。

「ダミーの四辺が光った気がした。」

「わたしが高い所苦手になったのって何でか覚えてる？」ややあって、五月が聞いてきた。相変わらず視線は床に残したままで、声も少し上ずっている。

「何てビルだったかど忘れしちゃったけど、あったじゃない。円くてガラス張りで周りに八ヶ所もエレベーターがあるビル。あそこのエレベーターに乗った時」

「もしかして、フライストリート？」

「そうそう、それ。君の頭は重宝するね」

「さっき思い出したんだ」

ドアに背中を張り付けたままうつむいて動こうとしない五月の姿が、唐突に浮かんだ。

あれは床の下を見ようとしていたんじゃないやなくて、恐かった？ それじゃ生まれつき高所恐怖症だと思っていたのは勘違いだ。

肌が泡立った。

そうか、僕はあの時何もしてあげられなかったんだ。

五月は続ける。

「それまでは高い所も全然平気だったんだけど、あのエレベーターって周り全部ガラスだったし、床もマジックミラーで下見えたじゃない。あれ、ほんと恐かったのよ。そりゃ床はちゃんとしてたけど、もう自分が何も無い所に立ってるみたいでさ。何でみんな怖がらなかつたのかわかんない。イズミは恐くなかつた？」

僕はうーんとうなる。覚えている限り五月が言うほどの恐さは感じなくて、景色がきれいだったことの方がずっと強く残っている。

「僕はあんまり気にしてなかつたなあ。最初はちょっと恐かったけど、外の景色に見とれちゃってたよ。ほとんど下なんて見てなかつた気がする。ほら、外海まで見えたから。五月もあっちまで見るのは初めてだったよね。覚えてないかな」

「だってわたし、途中からほとんど目えつぶってたんだもの。あんなに速いと思わなかつたし。何か滅茶苦茶な勢いで上がったじゃない？ 恐かったよー。近くのビルとか一気に見えなくなっちゃってさ。どこに連れて行かれるのって」

「そうだったんだ。そう言えば、陸橋は怖がつてなかつたけど、あれは大丈夫だったの？」

「あそこは高いとか高くないって感じじゃないもん。あ、イズミこそ覚えてないかな、あの時の事」

何だろう。まだ頭が混乱していて、頭の引き出しから欲しい物を取り出せない。申し訳ない気持ちだが先に立ってしまおう。太陽が今日最後の光をビルの隙間から放って、僕は思わず片目を閉じた。五月の足下から影が、すっと抜き取られるように伸びた。

「これ」五月は繋いだ手を軽く持ち上げた。

「手？」

「そうだよ。君って本当、記憶力いいのか抜けてるのかよく分からないよね。や、もしかしてわざと忘れた振りしてない？」

「してないよう」

「駄目じゃん。覚えといてよ。君、わたしが怖がってるのに気付いてずっと手え握っててくれたんだよ。わざわざ見晴らしい方から離れて。そしたら何か恐くなくなつてさ、それでエレベーター降りた後もずっと離さなかったの。結局高所恐怖症っぽくはなつちゃったけどね」

そこまで言つて一息つくくと、五月はとどめとばかりに僕の顔を指差した。

「これで思い出したんだから、今度は忘れないでよね」

その言葉とほぼ同時にダミーが下降し始めた。五月はきゃつと小さく悲鳴を上げてから安堵のため息をつく。

上がる時とは打って変わつてのんびりした、普通のエレベーターと変わらない速度でダミーは地面に戻って行く。もしかしたら、上に人がいるから気を遣っているのかもしれない。日は建物の向こうに沈んで、風は風いで、空気はコートの隙間からマイペースに染み込んでくる。エレベーターの現場には行けずに終わりそうな気がした。

「忘れない。ごめんね」僕は五月の耳元でささやいた。確かに、思い返せば五月の手を握っていた気がする。外の景色ばかりに気を取られて抜け落ちていたんだ。

とりあえず、この事は一生秘密にしておこうと思う。

「ラーメン一杯で許してあげる。あとね、一つあるんだけど言つてほしい？」

「うん。聞かせて欲しい」

「よろしい」五月は咳払いした。「あの時からね、わたし、イズミに手を握つてもらつたら何も恐くないんだよ」

スイッチが、今度こそ完全に入った気がした。

ダミーはもうすぐ地上に着く。多分、それまでに何かしないといけない。ただ、言葉が出て来なかった。何も答えられずに茶色がかつた瞳を見つめていると、背景にドームが現

れる。五月の手に心なしか力が込められた。

「な」耐えかねたように五月が口を開いた。「何か―」

「ずっと繋いでる」

「はい？」

「いやその、ずっと手を繋いでるから、何だろう、守るっていうか、あの、五月は安心してよ。大丈夫だから」

五月は長い時間黙っていた。何か判断がつかかねるといった沈黙。その間にダミーは家の屋根と同じくらい、次いで二階のベランダ、最後には塀と大して変わらない高さになった。僕はもう飛び降りて逃げ出したい気持ちで一杯だった。別にプロポーズしたとかいう訳でもないのに。

もう駄目だと思った時、五月はにっこり笑って言った。

「うん、全然期待してないけどお願いね！」

「五月い」

言い返そうとした僕の頬を空いた手でつねる。

「ありがとう」

そしてダミーはのっぺりした床に吸い込まれ、後には何事もなかったという顔の建設現場が残った。

僕達は色んな事を表に出したり内包したり、すごく複雑になってしまったのかもしれないけど、それでも一応大した問題もなく地上に戻ってきた。

六、冬が終わる

結局あの日、エレベーターを見ることは出来なかった。作業がもう終わるのとダミーの事で不具合があったからと職員さんが説明してくれた。もちろん五月は全然納得していなかったけど。

あのあと駆けつけてきてくれた人達が言うには、ダミーに人が乗っていたのはセンサーがすぐ察知したけど、もしそこから落ちても床から風が吹き出して受け止めてくれるから安全ということそのままにしておいたらいい。何だかひどくい加減な話だ。僕達はそのおかげで死ぬ思いだったっていうのに。

一応降りる速度はやっぱ気を遣って遅くしてくれていたみたい。そして安全策については事前に渡した資料に書いてあるということだった。

最初怒っていた五月はそれを聞いてあつと声を上げ、鞆から薄い冊子を取り出してページをめくると、あとは笑ってごまかしていた。

五月らしい話だと思う。

それから何日かして、例の建設会社から二枚のチケットが送られてきた。先日のお詫びということで、一般公開に先立ってエレベーターに乗ることができるといいう優待券みたいなものらしい。確か送り先は五月がメモか何かに書いていたと思うんだけど、何故うちに届いたんだろう。

その事を五月に聞いてみようとして、ふと考えた。きっとこれは五月がわざとやった事に違いない。だとしたら五月に任せるんじゃないかって僕がチケットをどうするか決めなければいけない。それが証拠に、五月と会って話している時、チケットの話題を彼女から振ってくることは一度もなかった。

そして、チケット到着から一週間経った今日、何故か五月は僕を避けているみたいだった。休み時間も昼休みも五月からは決して話しかけて来ないし僕から出向いてもあっさり流されてしまう。朝だつて家まで迎えに行ったら先に出かけてしまった。この十年間で五月が僕より早く学校に行った試しなんてないのに。

色々考え合わせてみても、これってプレッシャーだ。一週間も待たせやがってなんて思ってるに違いない。やっぱ、もう本当に覚悟を決めるしかないんだろうな。

そんな風にして全然集中できないまま授業は終了し、下校前の今に至る。窓の外は雲一つない突き抜けた青空で、風もほとんどない小春日和。丸まると太った雀が頼りなげに飛

んでいる。天気予報はもうすぐ春一番が吹くと予告していた。今日こそがエレベーターを見に行く日のような気がする。覚悟も決まってる。

さあ、あとは実行するだけだ。誘う文句も考えてある。五月の席は三つ後ろだ。行け！
そうして勢い良く振り返ると、五月がニヤニヤ笑いを浮かべながら僕を見下ろしていた。

「イズミくん」

やられた。

「五月い」

「ハラハラしたでしょ？」

負けた、と思った。身体力が全部抜けて、へたり込みそうになった。

「うん、何ていうかその、すごかった」

「で、どうするの？」

「どうするって」

五月の眉間にかすかにしわが寄る。いけない。

「チケットがさ、あるんだ。エレベーターの。これから時間あるなら、行かない？」

五月は答えない。目をつぶって迷うような仕草。沈黙が続く。

「いやその、一緒に行こうよ」

五月はしてやったりの表情を浮かべて僕に手を差し伸べる。僕も諦めて笑い、それからまた手を繋いでエレベーターの原っぱへと向かう。今度は五月の後ろではなく、すぐ横に並んで。